



Title	多文化コミュニケーション考：林田雅至先生の退職に寄せて
Author(s)	印南， 敬介
Citation	
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/81416
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

多文化コミュニケーション考

—— 林田雅至先生の退職に寄せて ——

大阪大学 CO デザインセンター 招へい教員

印南敬介

1. はじめに

本稿は 2020 年度をもって定年退職される林田雅至先生の退職記念論文集に寄せて書きおろした、2020 年度に筆者が出講した大阪大学外国語学部共通科目「多文化サポート概論 I」のオンライン授業報告書である。また、大阪大学外国語学部に在学中から大変お世話になった林田先生への感謝のしるしとして、先生との思い出もここに記しておきたい。

新型コロナウイルス(COVID-19)が世界的な猛威を振るい、日常生活はもとよりあらゆる経済活動や人的交流が大きな影響を受けた 2020 年は、誰の記憶の中にも暗澹たる影を落とした。いわゆる「コロナ禍」により生活様式は一変し、新常态(ニュー・ノーマル)が幅を利かせ、耳慣れない横文字も氾濫した。また企業など多くの組織において、どんな役職の人間よりも効果的にデジタル・トランスフォーメーションの考えを普及させ、またそれを推進・実践させたのは新型コロナウイルスだったと、皮肉混じりの冗談まで聞かれる始末だった。

大学の講義ももちろん例外ではなく、ご承知の通り、対面での授業は中止となり完全にオンライン化された。こういう言い回しをすると、いかにもデメリットばかりだったように思われるかもしれないが、決してそればかりではなかった。その功罪についての詳しい議論は別の機会に（あるいは他の寄稿者の皆さんの論文に）譲ることにして、ここではまず 2020 年度にオンラインで実施された講義の報告を、筆者の雑感とともにまとめておきたい。

2. オンライン講義報告 ——「多文化サポート概論Ⅰ」——

筆者は2020年6月23日、7月7日の二度にわたり「多文化サポート概論Ⅰ」のオンライン講義に参加した。前者はオブザーバーとして、後者は発表者としてである。この二週の講義では、様々な分野の第一線でご活躍されているゲストが、それぞれ20分の持ち時間で発表を行い、残りの時間を受講生からの質疑応答や意見交換に充てる形式が取られた。筆者が発表を担当した回は、田中志緒理氏と矢島裕章氏が参加した。筆者を含め、三人ともほぼ同学年の卒業生同士であり、受講生も交えて終始リラックスした雰囲気では話ができ、良かった。活動しているフィールドや専門性は異なれど、同窓生の話がこれほど身近に聞くことができ、何より筆者自身も刺激を受けた。貴重な機会とともに今回もまた林田先生に良縁をいただいた。質疑応答・意見交換のパートでは、出席している全員が発言の機会を持つように、林田先生が適宜ファシリテーションをされた。これにより、まるで動画を見せられているだけのような一方通行の講義にはならず、限られた時間の中でも有意義なやり取りができたと感じている。

今回の講義で、筆者は発表の持ち時間のほとんどを「[ナレッジキャピタル](#)」の紹介に割いた。その内容は以下の通りである。ナレッジキャピタルはJR大阪駅の北側に位置する複合施設「グランフロント大阪」の中核施設であり、知的創造・交流の場である。感性と技術の融合により新しい価値を生み出すことをコンセプトに、多様な人材とアイデアの交流による社会変革「ナレッジイノベーション」の創出を目的としている。ナレッジキャピタルは、人材の集積、出会いや交流・議論の場の提供、プロジェクトの展示やトライアルを通じてフィードバックを得る機会の提供、また様々なスキルや技術を持つ人同士をつなぎ、コーディネートするなどの機能を持ち、これらの機能を実践する施設の運営も行っている。新たな都市開発の形態としても国内外から多くの注目を集めており、現在16の海外の政府機関・研究機関・文化機関などと基本協定（相互連携の覚書）を締結している。また、ナレッジキャピタルの新たな取り組みである、実践的な学びとスタートアップ支援のための学びの場「[SpringX\(スプリングエックス\)](#)」の施設オープンに先駆けて、オンラインで学び、交流できるプログラム「バーチャル SpringX」の提供を開始した。以上、ナレッジキャピタルの基本的な説明に加えて、そこで筆者が担当する国際交流に関わる業務やリレーション業務についても簡単に触れた。

ウェブ会議システムを活用したオンラインでの講義は、先にも述べた通り、ともすると一方通行の「コンテンツ配信」のようになりがちである。この場合の「一方通行」とは、単に受講生の側に発言の機会があるかどうかといった形式的な問題だけではない。実際の対面授業においては、おそらく無意識のうちに、受講生と講師が互いの表情や声色の変化など、その場の空気を伝ってしか届けられない感覚をやり取りしている。一見すると講師が一方的に話すだけの講義形式でも、この感覚のやり取りがあることによって、ある意味では一方通行にならずに済むことが多い。ところが、今回のオンライン講義ではそれが無い(あるいは非常に弱い)。そのために、筆者と同様に、オンライン講義において発表者側に課せられるハードルの高さに困惑された方も多かったことと思う。また同時に、コミュニケーション全般において、この相互作用が重要な要素であることが再認識されたと感じる。特に「空気」を重んじる日本の文化において、これは顕著だったのではないかと推察している。

それに対する一つの挑戦が、11月7日に筆者が担当した大阪大学医療通訳養成コースのオンライン講義「通訳者のコミュニケーション力 理論と実践」で、コミュニケーション・スキルを磨くワークアウトを遠隔で実施したことだった。相手の置かれた環境や文脈に合わせて、適切な表現を用いながら効果的な伝達を行う能力を身につけるためのものだ。対面授業の場合はレゴブロックを用いた手作業も行う。より良い伝達の方法を共に模索すること、何よりもコミュニケーションの難しさや課題を共通認識することこそが、このワークアウトの醍醐味でもある。この時は、講師を務める筆者だけが遠隔地からウェブ会議システムで接続し、受講生のほぼ全員がひとつの会場にいた。また、遠隔地の筆者に会場(受講生)全体の雰囲気や伝わるように、事務局側でカメラアングルを調整いただいた。おかげで、受講生の手元の作業進捗までは確認できないものの、こちらからも受講生の反応を具に見ながら、全体を通して円滑にワークアウトを進めることができた。

幸いなことに、受講生の感想文を読んで「興味深かった」、「参考になった」などのコメントを見つけて、筆者はひとまず胸を撫で下ろしていた。これは何もオンライン講義に限った話ではなく、なにせ、大学生の頃の筆者は、企業人がゲスト講師として来ると、「会社の宣伝をしに来たのだな」くらいにしか思わないほど、斜に構えた学生だった。ひょっとすると、今回の受講生の中にも当時の筆者と同じようなことを思いながら話を聴いていた人がいたかもしれない(実際のところ、筆者の発表の大半はナレッジキャピタルの宣伝だったわけだから)。もっと個人的な話を期待されていたかもしれないと後になって少し反省した。とい

うことで、これ以降は今回の寄稿のもう一つの目的でもある、林田先生との思い出を紹介しながら、筆者の学生時代について綴ってみたいと思う。

3. 学生時代のこと —— 林田先生との思い出 ——

筆者は大阪大学外国語学部在学中に1年間休学して、ロンドンへ語学留学した。英国への激しい憧れに突き動かされるがままに決心した留学だった。学部ではポルトガル語を専攻していたのだが、まずは英国式の英語を習得したいという思いが強かった。さらには、生活様式や習慣・価値観まで、自分のありとあらゆる特徴を英国風に染めてしまいたいと本気で思っていたほど、この留学は筆者にとって壮大かつ無邪気な挑戦だった。

ロンドンでは、ケンジントン&チェルシー地区にある語学学校に通っていた。閑静な住宅街に位置する校舎で、先生たちは皆とても親切だった。先生たちは学生と一緒にパブへ繰り出すこともしばしばで、双方の心理的な距離が近かったことが印象に残っている（そして、学校での授業と同じくらい、パブでの「授業」も非常にためになった）。

その頃、筆者は同じく語学留学をしていた他の留学生の生活をサポートするボランティアをしていた。現地での生活に馴染めない学生をどうにか支援するためのものだが、筆者の役割は学生の困り事に耳を傾けることだった。一口に困り事と言っても、その中身は実に様々だった。最も典型的なのは、ホームステイ先の食事が自分に合わない、慢性的に体調がすぐれない、学校の授業について行けない、といったものだ。中には英語で自分の不満を上手く表現できない学生もいて、意思疎通を図るだけでも大変に苦労したことを憶えている。自分の感情も上手く表現できないし、相手の言っていることも十分に理解できない状況が、人間にとってどれほどのストレスになり得るのかを目の当たりにした。しかも、言語的な要因だけではなく、文化的な背景も関係し始めると、いよいよ問題は複雑になる。筆者の経験において、これが最初の本格的な多文化コミュニケーションだった。

そんなロンドンでの刺激的な日々を経て、帰国し復学して間もない頃は、今度は筆者が周囲の環境に馴染むことができずにいた。物事が色褪せて見えた、と言うと些か大袈裟な表現だが、せっかく英国で身に付けたディシプリンを損ないたくないという、自尊心から来る反発だったように思う。当時は、いったい何が不満なのかと訊ねられても、筆者自身、それを

表現する術を持たなかった。日本では、大学入学当初から、かつて地元で世話になった学習塾で講師の仕事（学生のアルバイトだが、ここでは敢えて仕事と表現する）をしていた。大学で講義が終わると一目散に仕事へ向かい、深夜までに及ぶ激務を終えて再び翌朝から大学へ行くような生活を続けていた。そんな生活が充実していないはずはなかったが、傍目には、やはりどこかふてくされた態度に見えたのかもしれない。ある日、大学での講義の後に林田先生に呼び止められて、「印南君、ひょっとして退屈しているのと違う？」と訊ねられたことは、今でもはっきりと記憶に残っている。筆者は咄嗟に「そんなことはありません」と答えた。すると、先生は「こういうのに興味はある？ 余裕があるなら、読んでみたら」と言って、英単語の語源について書かれた分厚い（ほとんど辞書のような）資料の束をくださったのだった。

またある時、林田先生の講義中に、大阪ユネスコ協会企画の青少年国際理解教育プログラムの資料が回覧されたことがあった。これは小・中学生の団体が海外へ短期留学し、現地で語学研修やアクティビティに参加するプログラムで、当時は大阪大学の学生を対象に、それに随行する世話役のボランティアを募っていた。「自費負担なしで海外へ行けるのなら」という安直な考えだったが、とにかく興味がある旨を先生に伝えて応募したところ、運良く採用してもらえた。結局、このプログラムには在学中に二度参加することになり、英国とフランスをそれぞれ二度ずつ訪問することになるのだが、いずれも参加者が体調を崩したり、乗るはずだった列車に乗り遅れたりなど、想定外のトラブルに数多く見舞われた。その度ごとに、ある時は病院で医師と、ある時は現地の学校で先生と、またある時は鉄道の駅で支配人と、参加者や行程管理をする添乗員との間で、通訳や折衝を繰り返した。今になって思えば、何の責任も持てない学生が、よくそこまで出しゃばったものだと思うが、筆者もそれぞれの状況を何とか切り抜けるのに必死だったのだ。しかしながら、これらの経験が後に多文化コミュニケーション・デザイナーとしての活動に大きな影響を与えたことは間違いない。

そうこうしているうちに、周囲の学生たちは就職活動を始めていて、企業説明会や採用面接に向けた対策、就職活動の進捗ばかりが話題になっていても、筆者は相変わらず頑なな学生だった。これまでの経験の中で妙な自信を得ていた筆者は、就職活動という社会の仕組みそのものに不信感を募らせていて、まったく受け付けようとしていなかった。そんな頃に、先に述べたプログラムの報告会が大阪大学豊中キャンパス内で開催された。そのあとで筆者は同キャンパス内にある林田先生の研究室にお邪魔した。先生が「ちょっと寄って行きま

せんか」と誘ってくださったのだ。先生の研究室を訪問したのは、その時が初めてだった。同時に、ポルトガル語の教授として筆者が認識していた林田先生は、そのごくわずかな一部分に過ぎず、ほんとうは実に学際的に、多岐にわたる分野の研究と実践に取り組まれていることを思い知ったのも、失礼ながらこの時だった。研究室に入ると、先生はアンティークでお洒落な腰掛けを筆者にすすめた。文献や書籍が所狭しと並んだ書架に囲まれて、とてもわくわくしたことを憶えている。その中でも一際目を引いたのは、美しい模様が施された絵皿や図像画、そしてなぜか先生が退室されるときにも延々と映画が再生され続けているモニターだった。そこで先生は、ご自身のコレクションとも言うべき品々について、あれこれと物語りをしてくださった。それはまるで筆者が何に興味を示すかを確かめているようでもあった。気が付けば、筆者は自分の将来についての悩みを赤裸々に話し始めていて、先生は辛抱強く最後まで親身になって話を聞いてくださっていた。

2013年3月に大阪大学を卒業後、同4月に筆者は株式会社スーパーステーションに入社し、ナレッジキャピタルのコミュニケーターとして勤務し始めた（現職は総合プロデューサー首席補佐）。コミュニケーターはナレッジキャピタルにおいて人と人、人とコト、人と情報をつなぐコミュニケーションのスペシャリストで、ナレッジキャピタルに集う多様な人材の交流を促す「触媒」の役割を果たす存在である。特に筆者の場合は、その業務を多言語で実践する機会にも恵まれた。海外からナレッジキャピタルを訪れる視察団やVIPとのコミュニケーションや、多数の海外連携・国際交流プロジェクトの進行を担当する中で、林田先生がかねてより指摘されていた「双方向外国語運用能力」涵養の機会が与えられたものと感じている。また同時に、大阪大学の「健康・医療イノベーション学II」、「多文化サポート概論I」、大阪大学医療通訳養成コースの「通訳者のコミュニケーション力 理論と実践」への出講など、林田先生は事あるごとに筆者にお声を掛けてくださり、筆者が自身の経験や活動について発表する場を与えてくださった。直近では、Contextual Sensitivity(文脈理解能力)と外国語の双方向運用能力をはかるための適正テストを林田先生と共同開発し、すでに多言語話者を対象に試験運用も開始している。

4. おわりに

林田先生はよく「私はトンネル業者のようなものだ」と仰っていたが、筆者が先生のことを思うとき、その博識ぶりや知的好奇心、物事に打ち込む際の熱意の量ばかりではなく、ご縁をつなぐことの妙にはいつも敬意と共に感動を覚える。先生の持つ柔和な物腰と、知識と教養に裏打ちされた抽斗の多さ、あらゆる分野を網羅的に受容する懐の深さ。筆者はいずれの点においても、まだまだ師の足元にも及ばないと感じさせられる。同時に良き理解者として、公私共に筆者を支え続けてくださった先生の優しさには、感謝に堪えない思いだ。この場を借りて、深謝申し上げたい。

《参考文献》

- 林田雅至, 印南敬介「グローバル外国語教育に不可欠な『高度汎用力』の原点 : interactive competence を支える『スクライビング』実践報告」, 2018.